



特集

授業アンケートが変わります!

立命館大学における授業アンケートの取り組み

本学では、1995年全学協議会確認「『すべての授業において、シラバスなどによる到達目標の明確化→授業実践→アンケートなどによる調査→授業改善』のプロセスを作り上げる必要性」にもとづいて、2001年度より、全学的な授業アンケートを実施しています（1993年度から一部の学部で実施）。

2004年度から実施された授業アンケートでは、各授業が一定進捗した10週目以降に、22～25項目にわたるアンケートを学生ならびに教員に実施して、実施後6日以内に結果を返却して授業改善に活かすとともに、全体的なデータについては、主成分分析^(*)や重回帰分析^(**)を行うことで、設問項目の相関関係等についてのデータを

蓄積し、教学検証のための分析をおこなってきました。

セメスター毎に4000件あまりの授業でアンケートが実施され、授業中に教員からの結果紹介や受講生との意見交換といった双方向コミュニケーションがおこなわれるとともに、2005年度からはその8割がWeb-CT（Webを介して教員と学生間の双方性を補完するコースツール）を通じて



(*) 主成分分析 / 主成分分析とは、データの中に見られる傾向を探るために用いる方法

(**) 重回帰分析 / 重回帰分析とは、いくつかの変数を使って、別の変数を予測するために用いる方法

CONTENTS

- P1 ▶ 授業アンケートが変わります!
- P3 ▶ 2006年度 新入生アンケートの結果から
- P4 ▶ 私語問題の解決に向けた検討委員会が開かれました
- P5 ▶ QRコードを用いた提出物管理サポートのご案内 ほか

- P6 ▶ 2006年度 第2回教育実践フォーラム ほか
- P7 ▶ 新任教員対象「ランチタイムFDサロン」を開催しました ほか
- P8 ▶ 学外FDフォーラム探訪記 ほか

公開されています。

その一方、これまでは
教学検証と授業改善と
いう2つの役割を1回の
授業アンケートで果たし
てきたため、実施時期が
授業の後半となり、授業
アンケートの結果をその
 Semester中の授業改善に十分に活かすことができず、また設問数が多く実施に時間がかかってしまうことから、これらの役割を一定分



離すべきである、という意見が出されてきました。また、設問に柔軟性を持たせて、学部カリキュラムに則した設問を設定したいとの声も寄せられました。

大学教育開発・支援センターでは、教学検証・授業に関する種々のデータ蓄積が一定程度達成できたことを受けて、これらの指摘を参考にしながら、これまでの授業アンケートでは一括して扱われていた授業改善、教学検証、コミュニケーションなどの役割を整理し、新たなアンケートのあり方について2005年度後期から検討を進めてきました。その結果、今年度後期 Semesterより新授業アンケートを実施することで全学的な合意を得ました。以下にその概要を紹介します。

2006年度後期から実施する新たな授業アンケートの特徴(主な変更点)

2006年から実施する新たな授業アンケートは、

- ① 個別授業における「授業改善」に資すること
- ② 学部・教学機関における組織的「教学改善」に資すること
- ③ 学生への説明責任を果たすこと
- ④ 公開を原則とすること

の4点を前提として実施されます。これまでの授業アンケートからの大きな変更点は以下の通りです。

- ① これまで22～25項目であった設問項目の精選をおこない、全学共通の設問は10項目程度とし、回答時間を大幅に削減する。
- ② 各学部・教学機関が出来る限り自由度をもって設問できるようにする。
- ③ アンケートの実施時期は、学生が授業の全容を把握したうえで回答することができる12週から13週目とする。
- ④ 授業5～6週目にコミュニケーションペーパー等を活用して、授業改善に向けて学生との意見交換を図る。(その方法や書式は各学部・教学機関に一任し、授業アンケートにおいてその実態を把握する)
- ⑤ QRコードシールを活用して、回答者の属性を把握し、教学改善に役立てる。その際には、回答者の個人情報を守るため、情報の取り扱いの規程を定めるとともに、実施に際しては細心の注意を払う。
- ⑥ 従来の授業アンケートで取り扱ってきた「教学検証」に資する内容は、毎回実施するのではなく、数年に1回、授業アンケートとは別に実施する。

また、多くの意見が寄せられたインターネットを使っのアンケートの実施については、現時点では回答率の担保が難しいことから、今後の検討課題としました。

今回の授業アンケートの見直しにあたっては、学生・教職員間でフォーラムを開催するなど、約半年間にわたって、意見交換を行ない最終案をまとめてきました。その過程では、授業アンケートのあり方に留まらず、授業や教育のあり方についても議論が行われました。

授業アンケートの内容や結果の分析に加えて、その結果の活用について、学生・教職員がともに議論することも重要です。本センターでは、授業アンケートを通して、「授業」や「教学」のあり方について学生・教職員がともに考え、意見交換を行う機会を、各授業をはじめとした多くの場所で行っていきたいと考えています。



新授業アンケート開発・検討委員会公開ワーキングの様子

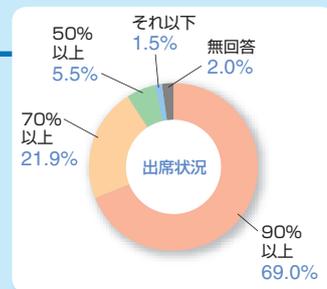
Colum 2006年度 新入生アンケートの結果から

前年度に引き続き、今年度も学生会が実施した新入生アンケートの分析をおこないました。本アンケートには、本学の新生の学習姿勢や実態が把握できる情報が多く含まれており、今後の教学改革の議論にとって有益な資料を提供するものであると考えています。

1. 出席状況

円グラフを見てみると、7割もの学生が授業への出席率は90%以上だと回答していることがわかります。これは非常に良好な出席率であり、入学後の1~2ヶ月はまじめに授業に出席しているということがわかります。

上回生の出席率については、今年度後期よりはじまる新授業アンケートに選択肢を設けているため、それにより経年変化を把握したいと考えています。

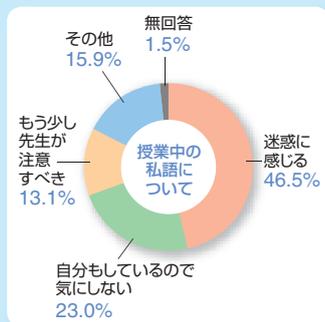


2. 授業中の私語について

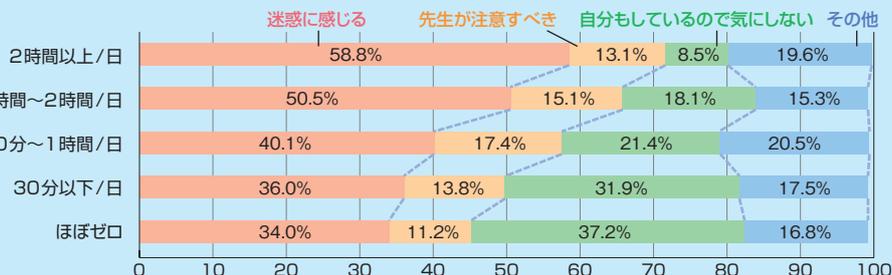
円グラフを見てみると、23%にも上る学生が授業中の私語について「自分もしているので気にならない」と回答しており、良好な授業環境を維持する上で深刻な事態と言えます。

「授業外の勉強時間」との相関を調べるクロス分析からは、勉強時間が長い学生ほど授業中の私語に迷惑を感じており、勉強時間が短い学生ほど「自分もしているので気にしない」と答えていることがわかります。学習意欲の低い学生の学習態度が、学習意欲の高い学生のモチベーションさえ減退させてしまう実態が明らかになっています。

今年7月、教学部では大学教育開発・支援センターを中心として、私語問題の解決に関わる検討委員会を設置し、各学部授業中の私語実態についてヒアリング調査を実施するとともに、学生や教員の意識調査や他大学調査をおこない、その結果を常任理事会に報告しました。さらに、後期の開講に向けて、現在「私語問題対応マニュアル(仮称)」を作成する予定です。



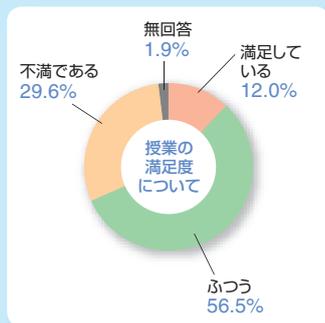
授業外の勉強時間との相関



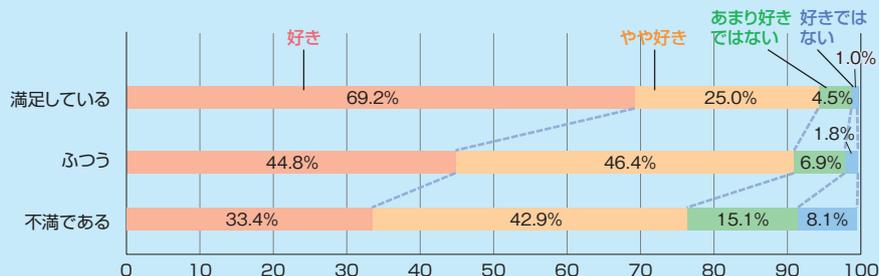
3. 講義の満足度について

円グラフを見てみると、講義への満足度は、「満足している」と「ふつう」を合わせると68.5%であるのに対して、「不満である」が29.6%を占めています。90%以上授業に出席している学生が7割いるにも関わらず、3割の学生が講義に対して不満を抱いていることから、学生が講義に抱いている不満の原因は何であるのかを探る、より詳細な調査が必要だと考えています。

また、「立命館大学が好きか」という項目とのクロス分析をおこなったところ、講義満足度が高い学生ほど、立命館が好きだと答えていることがわかりました。学生の本学への帰属意識を高めるためには、やはり大学の本質である授業をより良くしていくことが不可欠であると言えます。



立命館大学の好感度との相関



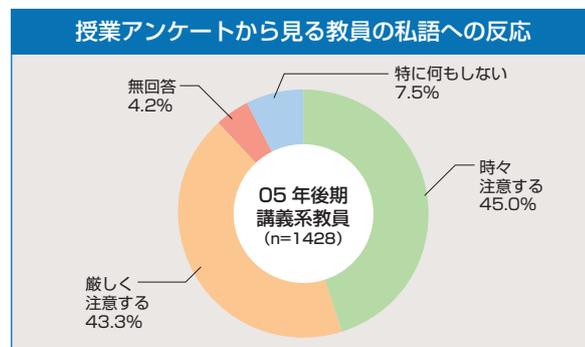
私語問題の解決に向けた検討委員会が開かれました

近年、大学教育の大衆化にともない2005年度にはユニバーサル段階と呼ばれる大学・短期大学への進学率が50%を超える状況となり、2007年度には大学全入時代を迎える中、大学に入学する学生の学力と学習意欲の両方が低下していると言われていいます。このような中で、授業中の私語問題についても担当教員が第一義的な責任を担いつつ、組織的対応が必要になっています。また、教員と一緒に授業を運営するTAについても、今後ますますその重要性が高まっていくと思われます。このため、本学では常任理事会のもとに私語問題とTA業務のあり方について検討する委員会を設置して、課題を整理するとともに広く今後の大学教育のあり方について検討をおこないました。

本委員会より報告された答申では、近年の学校教育をめぐる情勢分析から、多様化する学生実態や、関西4私大や他の有力大学と比して明らかとなった本学学生の特徴点、教職員が果たすべき役割・任務について報告がありました。本学の特徴のひとつは、学生数が多い大学のひとつである点です。これは、ある一つの入試形態のなかでも、入学者の学力格差が大きくなることを意味します。例えば、本学で最も入学者の多いA方式（外国語・国語・選択科目3教科型：文社系学部の場合）による入学者間の学力格差が、入学後の成績動向において拡大していることが明らかとなっています。さらに、入試方式の多様化によって様々な能力と進学動機をもつ学生が入学してくるようになってきていることもあげられます。

特徴点のもうひとつは、本学が関西4私大の中でもっとも自宅外生の比率が高く、過半数の学生が自宅外生で占められる唯一の大学であるということです。これは本学と同水準の学生数を有する全国の大学においても見られない現象です。それら自宅外学生の多さは、大学入学直後にこれまでの生活とはまったく異なる環境に適応して、生活スタイルを自ら確立していくことが求められるという課題に、多くの学生が直面していることを意味します。これまでの学生実態からみて、生活環境や学習スタイルを高等教育段階で求められるものに転換できる層と、その逆に

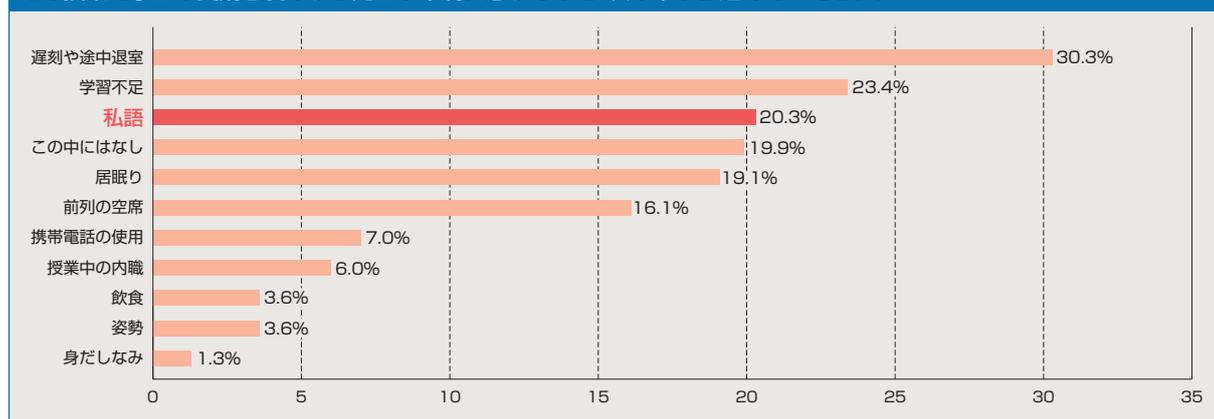
なかなか馴染めずに苦勞する層が一定数存在することを認識して、きめ細やかな対応が必要であるとの指摘がありました。本学の教職員は、学生実態に対する正確な認識を持って、学生教育への対応を臨機応変にしていかなければならないと考えられます。



また、教員の責務については講義の内外において教育に携わる教育者である点を抑えておかななくてはなりません。とりわけ、授業内における環境・秩序を維持する責務が存在することを確認する必要があります。これは、私語をおこなう学生のみならず、当該授業を受講し、かつ、私語をしない大半の学生の学ぶ権利を保障するものです。したがって私語に対する対応、教室内の秩序維持についての義務は、教育的姿勢を保持しながら、果たさなければならないとの確認がありました。職員の責務については、学生との窓口のみならず、日々の業務の中でも学生と常に接することがあります。その場合には、公の教育機関における教育従事者であることを前提とした対応が求められます。教職員は、教育従事者として、一致協力しながら、学生の学びと成長を保障する環境を維持発展させることに責務があり、かつ、社会からも期待される人材を送り出すための教育の責務を負っています。

以上のような答申を踏まえて、本学では今後これら内容について議論を深めるとともに、教員やTAに対して私語問題対応マニュアル（仮称）を作成・配布することをはじめとして、良好な授業環境の保全に向けた具体的取り組みを進めていくことにしています。

この授業で学生の受講態度のうち先生が不満に思うものを、次の中から選んでください。（出典：05年後期講義系教員アンケート結果）



Topics 2

QRコードを用いた提出物管理サポートのご案内

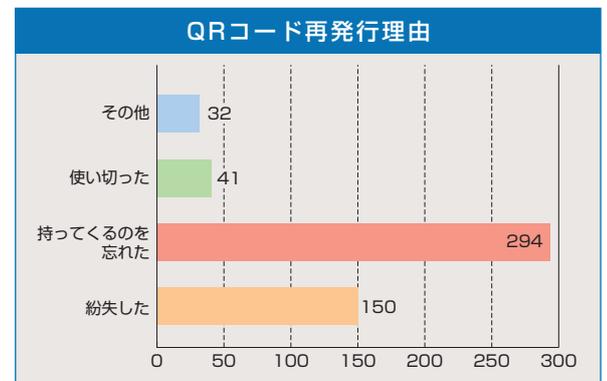
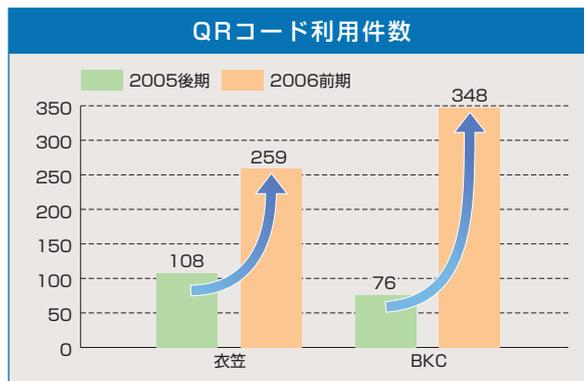
本学では、学生に「自ら学ぶスタイル」を確立させ、内から湧き出る「学びへの意欲」を高め、「知的好奇心を呼び覚ます」ための様々な教学改善を進めてきました。具体的には、教員と学生の双方向性を高めるとともに、小テストや課題レポート提出機能を活用した学生の自学自習への取組を強めるための「コースツール (WebCT) の導入」や、「シラバスの記載内容の見直し」を通じて、授業の教育目標や成績評価基準の明確化、授業外学習の指示追加などをおこなってきました。更に、ES (教育サポーター) 制度の更なる拡充を通じて受講生の学習支援を図るなど、学生の「学習意欲」を引き出す方策を進めています。また、授業中に出席管理や、コミュニケーションペーパー、小テスト、課題レポートの導入などをおこない、教員と学生の双方向性を高めたり、到達度検証の実施や成績評価の多様化・厳格化を進める一環として、全学部・全回生の学生に学生証番号と氏名をQRコードに置き換えた『QRコードシール』を配布して、出席を確認する授業において学生証番号と氏名を書く代わりに出席票に『QRコードシール』を貼付して貰い、回収後に専用機を使ってデータを読み取り、コースツールを



QRコードシール

通じてその結果をデジタル化 (Excelデータ) して返却するシステムの導入を進めてきました。これら取組を通じて、①教員が学生の理解度を把握する、②学生に自分の理解度を把握させる、③学生の更なる学習の動機付けにつなげる、④教員と学生間の双方向コミュニケーションを実現するなどの成果が期待されています。

このシステムは、昨年度から試行的に実施していましたが、今年度は全学部・全回生の学生に『QRコードシール』を事前配布するとともに、教員に利用を呼び掛けたこともあり、昨年度を大きく上回る利用件数となりました。しかし、その一方で学生の『QRコードシール』再発行件数は517件に上り、その理由の大半が「持ってくるのを忘れた」となっています。後期セメスターでは、授業アンケートにおいても『QRコードシール』を活用することになっており、より一層学生に携帯を呼び掛けるとともに、本システムの更なる改善・改良に向けて取り組んでいきたいと考えています。



Topics 3

紀要『立命館高等教育研究』第7号の掲載論文を募集しています!!

大学教育開発・支援センターでは、紀要『立命館高等教育研究』を定期発行しています。

これまで本紀要は、立命館大学の個々の教員による取組紹介を中心としてきましたが、今後は「学園内の組織ならびに個々の教職員の教育に関する研究成果や実践報告を収集・蓄積・発信することにより、組織的なFD活動、SD活動の進展に寄与することを目指す」ことを目的として、センターの取組紹介をはじめ、教員個人のみならず学部等の組織の実践報告や、教育に関わる職員の執

筆論文を積極的に掲載していきたいと考えています。

現在、第7号 (2007.4.1.発行予定) に掲載する論文を募集しています (募集締切:11月末予定)。学内教職員の皆様からの多数の応募をお待ちしています。

詳細は、本センターにご確認いただければ幸いです。本センターのホームページに、投稿規程ならびに執筆要領を公開していますのでご参照ください。



企画案内 1

2006年度 第2回 教育実践フォーラム

今回は、「シラバスから始める教育改革」をテーマとしました。昨年度のシラバス改訂を踏まえ、他大学の先進的事例を参考に、学生の「確かな学力」形成に資するシラバスのあり方を考えたいと思います。シラバスを通じた、各種カリキュラム改革や授業改善活動はいかに実現できるでしょうか。今回のフォーラムでは、その解決策を探っていきます。そして、シラバスがいかに教育改革全体のキーワードになるか、大学教育開発・支援センターがそれをどのように支援すべきかを参加者全員で話し合いたいと考えています。

シラバスについては、執



筆者である教員、利用者である学生・大学院生、管理者である職員、皆さんそれぞれご意見をお持ちだと思います。多くの皆さんに是非参加いただき、日常感じておられる忌憚のないご意見をお聞かせください。

テ ー マ	シラバスから始める教育改革	
開 催 日 時	K I C	10月25日(水) 18:00~20:00 場所: 修学館2階 第2共同研究会室
	B K C	10月26日(木) 18:00~20:00 場所: コアステーション3階 第3会議室
対 象	すべての教職員、学生ならびに大学院生	
報 告 者	大学教育開発・支援センター教授 沖 裕貴	

企画案内 2

2006年度「公開授業と研究会」の実施について

本学におけるFD活動の一つである「公開授業と研究会」は、本センターが主催する形で開催していたものを、より各学部・教学機関に根ざした組織的な取組となるよう、2005年度より各学部・教学機関が主催する形式に改めました。また、『「公開授業と研究会」の進め方ハンドブック』を作成・配布して、「公開授業と研究会」をおこなう意義の共通理解の促進や、学部・教学機関ごとに実施する方法の普及等に進めてきましたが、まだ残された課題もあります。

このため、これまで本センターが行なってきた、①財政面の支援、②企画立案のアドバイス、③指導助言者の派遣、④広報活動の協力、⑤撮影スタッフの紹介、といった支援に加えて、今年度は9月に学部・教学機関の執行部を対象として、「公開授業と研究会」の運営ノウハウを習得して、運営の中核を担うファシリテーター養成のための学習会を実施し、各学部・教学機関が主体となって「公開授業と研究会」に取組めるよう支援することとしました。

学習会では、本センターの沖裕貴教授が「公開授業と研究会」を行なう意義や、実際の進め方について講演をおこなった後、公開授業を編集したビデオを視聴し、研究会の進め方に関する実習をおこないました。参加者からは、「公開授業の効果と重要性を身を持って体験した」、「この学習会に学部の他の先生にも受講してもらいたい」といった積極的な感想が多く出され、本センターとしても、先生方の理解が深まったことを実感することができました。今後とも学習会を継続して行なっていきたいと考えています。



「公開授業と研究会」の目的・目標は以下のようになっています。

1) 目的

教員相互の学び合いの場を提供することを通じて、教育実践における改善を進める仕組みを学部・教学機関ごとに構築する

2) 目標

- ①学生実態の把握を通じて、教育力強化に向けた目標の共有化を図る
- ②教育力強化に向けた教授法の開発・共有化を図る
- ③教授法の改善に向けた相互交流を進めるための恒常的システムの構築
- ④大学・学部の枠を超えて優れた先進的取組事例の共有化を図る

今年度の各学部・教学機関による「公開授業と研究会」の実施時期は、11月以降になる予定ですが、それぞれの「公開授業と研究会」がより実り多きものとなるように、本センターとしても引き続き支援を進めていきます。



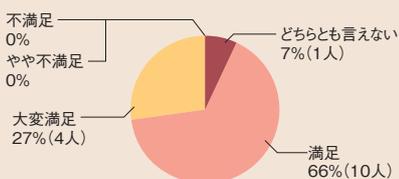
企画報告

新任教員対象「ランチタイムFDサロン」を開催しました

06年度新任教員対象としたフォローアップ研修「ランチタイムFDサロン」を6月上旬に実施しました。

より多くの先生方に参加していただけるよう、衣笠キャンパスとBKCキャンパスそれぞれ2日間設定することで、16名の参加がありました。今回は、大学教育開発・支援センターのスタッフと共に、授業における苦労話や悩みなどを共有し、解決策や支援策などを考える場となることを目的としていましたが、学生との接し方や情報機材の使い方、教学上の様々な手続きや規程等、様々なテーマについて質問や意見が出され、新任教員が抱える悩みや疑問が非常に幅広いということが明らかになりました。教育現場以外の職場から赴任された実務家教員からは、学生との接し方について戸惑いを感じているとの悩みが多く聞かれ、また、学生が教員に生活面の細かな相談や質問を寄せている実態も明らかになりました。FDサロンで出された要望や意見については、学部執行部や事務室と連携を取りながら対応していきたいと思っております。また、後期も前期に引き続き開催して欲しいとの要望が出されており、開催にむけた検討を進めたいと考えています。

Q1 満足度



Q2 参考になった点(抜粋)

- 同じ悩みを持った先生がいたこと
- 他の先生の授業のやり方、学生の様子が聞けたこと
- 学生への接し方が参考になったこと
- 他学部の様子が聞けたこと
- QRコードが使われている先生が多いということが分かったこと
- 大規模授業の工夫、ITの活用が参考になったこと
- 基礎演習の運営方法、工夫の仕方について勉強できたこと
- 大学の制度がより詳しく理解できたこと

Q3 もう少し詳しく聞きたかった点(抜粋)

- 無気力感に悩まされている学生への対応
- 学生像の分析結果
- 成績評価の観点・手法
- 留学生への対応
- WebCTの使い方
- 授業アンケートの内容・分析

Q4 意見・感想(抜粋)

- 立命館大学がどのように学生を育てようとしているのか、その点を理解できたことがよかった
- 予想以上に有意義だった
- 日頃、気になっていることを話す機会となり参考になった
- 他の先生方の意見、悩み、感想を聞ける良い機会であった
- 新任教員の持つ共通の悩み、対処方法について知ることができてよかった
- 昼食時間というのが参加しやすくてよかった
- もっと多数の先生方の意見を聞きたかった

Q5 今後、どのような教育支援(研修含む)を希望されますか?(抜粋)

- 授業におけるケーススタディ、研修、コーチング
- WebCTをはじめ情報ツールやシステムを活用した授業支援
- 今回の企画のような学部を超えた情報交換会の開催
- いくつかのテーマを設定した集まりの定期的な開催



ホームページをリニューアルしました



インターネットは、情報の受信者に必要な情報を提供する手段として、また情報の発信者には情報を普及させるための手段として、急速にその有効性が高まってきています。各企業や組織はホームページを通して自らの情報を発信していますが、近年、第三者機関が大学HPについて

でもランキング調査を実施しており、ホームページの充実が大学評価のひとつの指標になっています。

本センターとしても、ホームページを通じた情報発信を強化することを通じて、その活動内容の社会的説明責任を果たすとともに、センターの意義や役割、取組を共有化することを通じて、学内の教育力強化に向けた取り組みを推進することを目指して、ホームページをリニューアルしました。

トップページ

- **新着情報**: センターが主催する企画の開催案内・報告などをいち早くお知らせします。
- **貸出図書**: センターで扱っている貸出図書の一覧を掲載するとともに、新着図書の案内もしています。ご希望の場合は、メールでお知らせいただければ、学内便でお送りします。
- **他大学情報**: 他大学で開催される教育に関するシンポジウムや講演会の情報を提供しています。参加を希望される場合は、センターから諸経費の補助をおこないますので、ご連絡ください。

センター概要

- センター設置に至った経緯、センターの目的、センターが取り組む事業を紹介しています。

センター教員紹介

- センター専属教員のプロフィールを掲載しています。

企画報告

- **公開授業と研究会**: これまで実施してきた「公開授業と研究会」の一覧を掲載しています。リンクをクリックすると、開催案内を見ることができます。
- **教育実践フォーラム**: これまで実施してきた「教育実践フォーラム」の一覧を掲載しています。フォーラムの様子を映像で見ることができます。レジュメも掲載しています。
- **その他の企画**: 教員研修やFDプロジェクト等、センターが実施してきたその他の企画の報告を掲載しています。

授業アンケート(学内限定)

- これまで実施してきた授業アンケートの結果を掲載しています。

刊行物

- **立命館高等教育研究**: これまで発行してきたセンターの紀要「立命館高等教育研究」の目次を紹介するとともに、投稿希望者のために投稿規定と執筆要領を掲載しています。
- **RSC News**: センターの取組を紹介するニュースレター「RSC News」の全文をPDFファイルにて公開しています。

QRコード

- QRコード利用の手引きや作業依頼書、出席カードやコミュニケーションペーパーがダウンロードできます。

センターの活動

- 1999年度以降、センターが取り組んできた活動を紹介しています。年度ごとのリンク先には、より詳細な活動内容を掲載しています。

※その他の情報も掲載していますので、ぜひご覧ください。

HPアドレスは本紙8Pに記載しています。



6月10日 第8回大学評価セミナー

6月10日、東洋大学白山キャンパスにおいて、「今、求められる導入教育・リメディアル教育とは」をテーマとして、第8回大学評価セミナーが開催されました。酒井志延氏（千葉商科大学 商経学部教授）からは、リメディアル教育学会における議論状況を踏まえ、導入教育・リメディアル教育の現状と課題について紹介がありました。リメディアル教育と導入教育それぞれの課題について触れ、リメディアル教育では対象者が「学習が出来ていない」と思っているため、「わかる→面白い→わかりやすい→ためになる→やってみる」というサイクルに乗せる仕掛けが必要であるとの見解が示され、導入教育においては、主体的に行動するという学習習慣の獲得が出来ていない学生には単位を与えるべきではないという意見が述べられました。また、学生に力を

つけさせないまま卒業させることは大学の評価を落とすことにつながるため、リメディアル教育は重要であると強調され、実際の学力向上を検証するための測定テストの実施が必須であるとの主張が展開されました。

続いて、上田敏和氏（神奈川県立弥栄高等学校 総括教諭）からは、高校生の学力実態について報告がありました。中堅上位校でも明らかに学力が低下し、落ち着きのない生徒が増加しているとの指摘があり、この生徒たちが3年後に大学へ入学することになる点を強調されました。さらに、「勉強が出来なくても良い」＝「それも個性のうち」という考え方が広まり、キャリアなどでも現状に満足してしまう傾向にあるとの報告があり、今後の導入期教育やリメディアル教育考える上で、参考になるセミナーとなりました。

6月17日18日 教育改革ITフォーラム

6月16日～17日、帝塚山大学にて、私立大学情報教育協会主催の教育改革ITフォーラムが開催されました。このフォーラムは、教育改革のための課題を確認し、教員に求められる教育力、ファカルティ・デベロップメントとしてのIT活用対策などについて討議することを目的として開催されました。

16日の全体会では、明治大学の情報化推進本部における取り組みが紹介され、2004年の学長交代を機に教育のIT化を重要課題とし、学長の下に「教育の情報化推進本部」を設置、責任体制を明確にしたことが強調されました。また、教育の支援については教材開発室の設置と、特色GPと連動したプロジェクトの展開を進めていく計画であるとの報告がありました。

17日は各分科会において各大学での取り組みが紹介され、討議が行われました。「教育改革実現のための教育支援と組織的取り組み」分科会では、帝塚山大学、玉川大学での授業支援ツール（LMS）を利用した、授業の双方向性を目指す取り組みについて紹介がありました。帝塚山大学では、TIES（タイズ）というツールを開発して、平成16年度特色GPと連動した取り組みがおこなわれており、e-learningを利用した学生の自立性を高める教育学習支援システムとして、学生の理解向上、予習復習に寄与しているとの報告がありました。また、玉川大学では既存の製品をカスタマイズし、学生への教務情報、授業の情報などの情報提供を一元化しているとの報告があり、いずれの大学も授業への導入・サポートの専門部署を立ち上げ、積極的な活動を行っている様子が伺えました。

京都高等教育研究センター主催2005年度プロジェクト研究報告会

6月24日（土）、キャンパスプラザ京都において、京都高等教育研究センター主催の2005年度プロジェクト研究報告会が開催されました。

京都高等教育研究センターは、大学連携のシステムを基礎として「厳しい社会情勢の中で個別大学が個性輝く大学」を実践するための研究を推進することを目的として、2005年3月に大学コンソーシアム京都によって開設されました。

「FD課題研究」の報告では、FD活動の流れは、教室内の授業改善を中心としたFD活動である第1期、大学内における組織的活動としてのFD活動である第2期、高校や社会などとの連携を視野に入れたFD活動である第3期、といった流れで進むとの報告がありました。FD活動を進める上での問題点については、多くの大学において組織委員の選出方法はトップダウンであるのに対して、推進形態に関してはボトムアップであるという矛盾が、教員の個人努力と判断に依存する状況を生み出し、FD活動の進展しない原因のひとつになっていると考えられるとの報告があり、教員個人

の努力に依存する現状に代わる組織的モデルを広く提示することによって、第2期の目標達成に努める必要があるとの本プロジェクトの今後の課題が示されました。

原清治氏（佛教大学）からは、「出席率が良いからといって、学生がまじめになったとは言えない。授業料の対価として、出席率や課題の提出などを含めた厳しい評価を望む声が多い。学生が教員に対して厳しい評価を求めるということは、自身が教員を厳しく評価するという意識の現われでもあり、今後はFD活動に学生を巻き込み、学生の意見を取り入れながら進めていく必要がある。」との話がありました。

学生の多様化に伴い、個々の学生の価値観や授業へのスタンスも様々に変化しており、教職員間に存在する従来の固定観念や共通イメージは通用しないようになってきているようです。今後は本センターのFD活動においても、積極的に学生参画の仕組みを取り入れて、現状に見合った取組みを進めていきたいと思います。

新着図書情報

BOOK



EQコーチングのスキル：感情と行動に働きかける

上村光裕（著）／松下信武（著）／あさ出版／2005.1／4-86063-084-X

自信力が学生を変える：大学生意識調査からの提言（平凡社新書276）

河地和子（著）／平凡社／2005.6／4-582-85276-9

絵で学ぶコーチング：すぐ使えるコミュニケーション・スキル50

伊藤守（著）／日本経団連／2003.5／4-8185-2302-X

必読教師力アップのためのコーチング

入門：子どもを伸ばすコツと会話術

河北隆子（著）／明治図書／2006.2／4-18-611016-6

大学の授業を変える：臨床・教育心理学を活かした、学びを生む授業法

古宮昇（著）／晃洋書房／2004.8／4-7710-1576-7

教師のためのアサーション

園田雅代、中金洋子、沢崎俊之（編著）／金子書房／2002.10／4-7608-9532-9

教師力：教師として今を生きるヒント（上）

河村茂雄（著）／誠信書房／2003.6／4-414-20214-0

教師力：教師として今を生きるヒント

（下）

河村茂雄（著）／誠信書房／2003.6／4-414-20215-9

カウンセラーのコーチング術

市毛恵子（著）／PHP研究所／2002.10／4-569-62348-4

チャイルド・スタディ・コーチング

ベガサプランニング（編著）／弘文堂／2005.8／4-335-55103-7

教師のためのソーシャル・スキル：子どもとの人間関係を深める技術

河村茂雄（著）／誠信書房／2002.12／4-414-20212-4

図解コーチングスキル

鈴木義幸（著）／ティスカヴァー・トゥエンティワン

／2005.7／4-887-59389-9

大学改革の社会学

（高等教育シリーズ136）

天野郁夫（著）／玉川大学出版部／2006.3／4-472-40328-5

日本のティーチング・アシスタント制度：

大学教育の改善と人的資源の活用

北野秋男（編著）／東信堂／2006.6／4-88713-684-6



立命館大学
大学教育開発・支援センター

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
◎TEL:075-465-8304（内線：511-7145）◎FAX:075-465-8318（内線：511-7149）
◎e-mail:fd71cer@st.ritsumeai.ac.jp